

日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践 —戦争の痕跡を受け止めつつ震災を乗り越えようとする一人ひとりのライフストーリー—

WANG SHINUO

1980年代後半、日本では産業化と都市化により農村が周辺化し、日本人女性が伝統的な農村家族構造を敬遠する傾向が強まった結果、多くの農村男性が深刻な結婚難に直面した。これに対し、地方行政は「アジアからの花嫁」を迎える国際結婚を推進し、特に東北6県と新潟県では「ムラの国際結婚」が全国平均を上回る現象が確認された。その中で、1990年代以降、中国出身の女性が主要な結婚移住者となっていった。ただし、本稿はこうした結婚移住した中国人女性に焦点を当てるものの、当初から「国際結婚の女性」という枠組みや「満洲」移民など特定の歴史的出来事を前提とせず、あくまでも3・11震災後に福島県に暮らす中国人の生活経験への6年前の調査から出発している点である。この間に支援活動を通じて知り合いになったのが、福島に日本人男性との結婚を機に移住してきた中国出身の女性たちであり、多くは1990年代後半から2000年代初頭にかけて日本で暮らし始めている。そして調査を進める中で気付いたのは、福島県在住の中国人女性には中国東北部出身者が圧倒的に多いという現実であり、これは日中「二つの東北」が歴史的に結びついてきた背景によるものである。



図1. 日中「二つの東北」を巡る人口移動の見取り図(先行文献を参考に筆者作成)

具体的な歴史的な文脈として(図1参照)、戦時下に農山漁村である日本の東北地方から、現在中国東北部にあたる「満洲」へ農業移民として渡った人々が多く存在していたため、戦後には中国残留邦人を中心とする日中「二つの東北」間における人脈ネットワークとして残されている。一方、1978年の改革開放以降、「単位制」の衰退が中国全土で進行する中で、とりわけ「老工業基地」である中国東北部の転換が他地域よりも遅れ、1990年代後半に深刻な失業問題に直面した。多くの女性たちはこの局面を打開するため、民間の人脈ネットワークを頼りに日本東北への結婚移住を選択したのである。その後、移住して間もなく3・11震災により生活基盤が揺るがされたものの、彼女らは最終的に福島に留まり続けている。彼女たちは「満洲」時代を直接経験してはいないものの、移住先の福島に住む満洲経験者との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部で無意識に体感してきた「満洲」の痕跡が蘇ってくるのである。ただし、留意すべきは、女性の多くが当初「先進国としての日本」のイメージを抱いて移住してきた一方、「二つの東北」をめぐる歴史的構造については、移住後の日常生活の中で身体を通じて徐々に受け止め理解していったことが次第に分かってきた。従って、本稿では、中国東北部に生まれ、中国東北部における「社会主義

的近代化」の影響を受けながら、1990年代末頃に日本の東北地方の福島県に結婚移住してきた60年代70年代生まれの中国人女性の経験に注目した。そして移住後も長く住み続ける中で、この土地の歴史に由来する深い傷跡を受け止めながら、3・11震災を経験しつつ、なお留まり続ける生の営みを選択した理由について、彼女らの移動を介した生活経験から迫っていくものである。

本論文は全7章で構成され、序章に続き、第2～3章では関連する先行研究を整理した上で本研究の視座を明確にしつつ、適切な方法論の選択と理論的枠組みを提示した。具体的には、従来、中国東北部の土地柄は単に女性の移住ルートとなる「社会関係資本」としてのみ扱われ、移住前後を通じて織り込まれてきた女性一人ひとりの人生経験そのものが十分に検討されていない課題があった。また、女性たちの移動を介した人生を理解する土台として、以下の3点に基づいて既存研究を分析した。すなわち、1つに3・11震災をめぐる議論では移民女性像が「災害弱者」として単純化された問題が見えており、2つに女性たちの人生の原風景である「満洲」記憶に関する議論では、中国における「満洲」記憶が記録の「空白」の段階から現在の「語りづらい」段階へと移行している現状が示された。3つに中国東北部を生きてきた女性たちに注目する際、単位制と結びついた人生経験に対する検討が不足している。こうした課題を踏まえ、本研究では日中「二つの東北」の歴史的文脈を重視し、移住前後や結婚前後といった二分法的な枠組みに区分せず、彼女らの生活や経験の連続性を意識しつつ、彼女らの国境を越えた日々の営みに注目した。また、「満洲」記憶や「単位制社会」をめぐる女性の思いは、目に見えない形で彼女らが心の底で抱え続けていることであるため、本研究ではライフストーリー法(対話的構築主義)を用い、彼女らの「語り」に耳を傾け、時間をかけた継続的な対話を通じて、「二つの東北」を生きる彼女らの日常の細部に潜む「歴史実践」を描き出すことを試みた。歴史学者の保莉実氏(2008)が提示した「歴史実践」とは、現在と切り離された過去の事実を記録する「歴史研究」と対照して提示された術語である。保莉は、歴史研究などよりもはるかに多様な、人々が日常的実践において歴史に触れる広範な諸行為を「歴史実践」と呼んだ。本研究では、中国東北出身の女性が日本でのかつての「満洲」との関わり合い並びに「満洲」経験を背負った人々との出会いや対話を通して、日常的に歴史を実践している様子に着目していた。ただし、本稿で扱う女性たちは、先住民のように先祖の土地に根付いて暮らしているのではなく、生まれ育った中国の東北から移住先の日本の東北へと移動することで、自身を相対化しつつ「歴史実践」を行う点である。それゆえに本稿では、女性たちが国境を超えた移動を介した経験の中で「歴史を実践している」ことを重視する意味で、「二つの東北」という表現を用いることとする。

続く第4～6章では、女性たちの移動を介した諸経験をめぐる研究内容と結果を示している。第4章では、3・11震災といった非常事態における女性たちの姿勢に焦点を当てた。まず、調査協力者である11名の女性の来歴を示しつつ、そこから一人ひとりの語りから、震災直後に彼女らが直面していた困難や避難選択を俯瞰した。その結果、震災直後の「帰った」・「残った」という両極端な外国人の避難選択が注目される元で、日中両国に引き裂かれる移住女性たちの葛藤が多く見過ごされていることが分かってきた。こうした生き方の裏で見え隠れする彼女らの複層的不安が、震災の非常時に増幅された一方で、それが地域でネットワークを立ち上げる原動力ともなったのである。それを踏まえ、現在もこうしたネットワークに頼りつつ生きる霞氏と芳氏(いずれも仮名)の来歴を考慮した震災経験を踏まえつつ、彼女らにとっての震災の意味を考察した。その結果、彼女らはこれまでの移住をめぐる人生経験を裏返すかのようにレジリエンスの種へと転換し、震災直後の地域を支え、「災害弱者」を越える姿勢が顕著に見えてきた。ここで留意すべきは、共に味わった震災経験が、彼女らを「よそ者」から地域社会に受け入れられる存在へと変え、そこで初めて、福島この土地との絆を深めながら、この人々と互いに理解し・支え合うようになったことが分かってきた。それゆえに、震災経験は、図らずも彼女らが日本の東北地方の重層的な歴史を知ろうとする情

動的な起点となったといえる。さらに重要なのは、移住後に直面した言語の壁や社会的分断という課題を克服する過程において、女性たちが構造的な問題に対して柔軟かつ巧みに対応する自らの「行為主体性」を形成していった点である。この「行為主体性」は、彼女らの暮らしに通底し、彼女らの生きる知恵となっていた。他方、震災を乗り越え、地域ネットワークに大きく依拠しながらも、彼女らの心には依然として「揺らぎ」が残されていることが分かってきた。

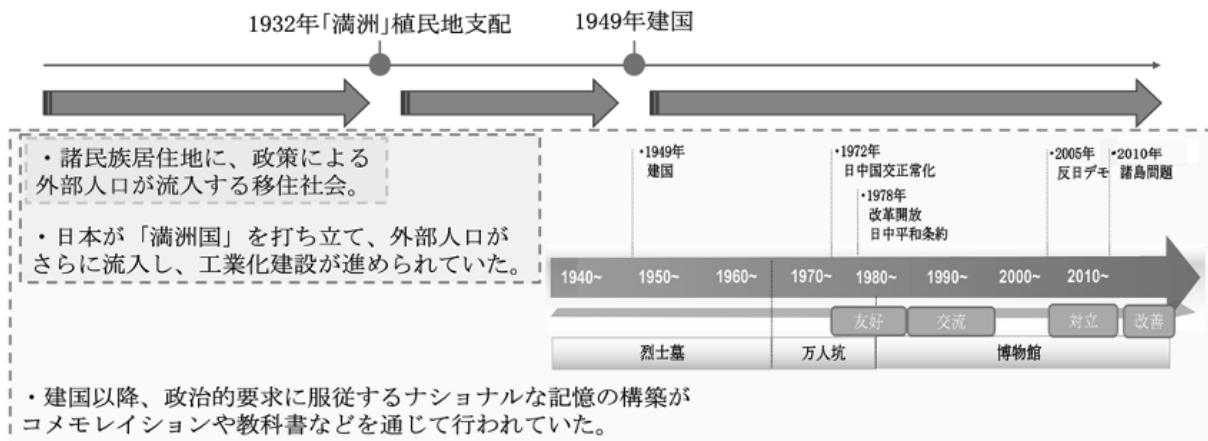


図2. 中国東北社会の歴史的変遷(先行研究を基に筆者作成)

続く第5章では、女性たちの「心の揺らぎ」の内実に迫っていく一環として、「満洲」時代を直接に経験していない彼女らの「満洲」をめぐる記憶に着目した。中国の「満洲」記憶の叙述における主導的なナショナルな記憶の存在、及び90年代以降の日中関係の緊張化という構造問題(図2参照)を踏まえ、霞氏と英氏(いずれも仮名)の「満洲」記憶に関するライフストーリーを通じて彼女らの歴史実践を見つめ、彼女らの「満洲」記憶の形成プロセスをめぐり、「種まきの幼少期」、「愛国主義教育を受ける学生時代」と「視野が広がっていく移住後の時期」との三段階に整理することができた。その中で、移動を通じて、彼女らが「満洲」をめぐる植民地支配—被支配の両端に置かれた日中双方の庶民からの視点をそれぞれ吸収していく中で、より立体的な「満洲」像を自ら模索し続けている姿が浮かび上がってきた。一方で、東北外部の出身者である筆者が女性たちとの対話を通じて次第に分かってきたことは、愛国主義教育が牽引する「(東北部の)外側からの視線」で構築された「満洲」記憶が強力かつ普遍的に語られる中で、彼女らは自身の記憶がその叙述構造から乖離していることを常に意識しているという点も明らかとなった。ただし、彼女らは真正面から抵抗するのではなく、日常の中で、地域の満洲経験者たちの「満洲」記憶に耳を傾けることで、個々人の具体的な接触の中に、常により広く重層的な「満洲」像を模索しつつ、自らの記憶を位置付けていくと工夫しているのである。この日常における小さな営みは、記憶の権力構造に対する彼女らの柔軟な抵抗であると考えられた。

さらに第6章では、先述の震災経験と「満洲」の傷跡を踏まえ、女性たちの人生そのものをより包括的に捉え、特に、彼女らが移住に至った背景として、中国東北部の80年代以降の「工業単位制社会」の弱体化という社会転換を視野に入れた。移住後、彼女らが先述した日本東北地方の歴史に由来する重層的な傷跡を受け止めながらも、なおそこに留まり続けるといった選択を理解していくために、春氏と松氏(いずれも仮名)という2名の女性のライフストーリーを描き出した。それらを通じて、彼女らが社会の激動や3・11後の復興に立ち向かいながら、如何にして生活を再構築しており、また中国東北での経験に応答しつつ日本東北の置かれている立場を刻々と気付いてきたのか、こうした日々の生活に潜む彼女らの歴史実

践を描き出した。結果として、日中「二つの東北」の根底にある戦争の痕跡は、両地域を結ぶ人脈ネットワークだけでなく、世代を超えて連鎖した心の傷も残していることは分かってきた。また、「東京中心主義」の犠牲となる「東北」問題は、実は重層した形で女性たちの暮らしの隅々に見え隠れしていた。一方、これと類似する関係性が、中国社会の文脈においても「南方」と「我々東北」という象徴的な言葉があるように、単位制が弱体化しつつある社会転換の過程で見えてきた。このように、戦争の歴史において「植民地支配—被支配」の両端に置かれる「二つの東北」は、それぞれ異なる近代化の経路を歩んできたものの、実は類似した大きな進歩叙述が牽引する下で、再び共に「中央」との関係で対置される「周辺」の立場に追い込まれたことも見えてきた。強調すべきは、女性たちが異なる「二つの東北」の対立や断絶に着目するのではなく、時間と共に流れる共通する「東北」の痛みを目に向け、身をもって感じ取ろうとする姿が顕著に見えており、彼女らが「二つの東北」を繋ぐ「結び目」になりゆく可能性を考察した。以上を踏まえ、本研究で深く認識する「二つの東北」に秘める三重の意味を再確認した。

終章にあたる第7章では、本研究の一連の成果を通じて得られた知見をまとめた。その上で、今後の展望として、女性たちの「歴史実践」と「対話」を重ねながら見つめてきたからこそ、調査者である筆者は調査を始めた当初からの「同じ中国人同士」という意識から、次第に自分自身がいわゆる「南方」の立場にある自らの「構え」を意識し、さらに少しずつ彼女らの意味世界に理解することができたことを振り返った。こうした「対話」が筆者自身にもたされた能動的な影響と未来への展望について触れつつ、まとめに代えた。
(環境行動学)